

ディベートを用いて文学を読む

文学的文章の読解におけるディベート

ディベート入門期の指導として、今回はホップ・ステップ・ジャンプの3つの段階を踏んだ形をとりました。第1段階が、台本による模擬ディベート、第2段階が、身近な話題からのディベート・マッチ、そして第3段階が、文学的文章の読解学習におけるディベートです。

台本による模擬ディベートにより、ディベートのやり方や進め方を理解し、ディベートを少しでも身近なものにすることができました。次のディベート・マッチでは、実際にやってみることで、ディベートのおもしろさやむずかしさ、その魅力などを実感することができました。ここまでで、ディベートそのものの指導は終了となります。そして、入門期の最終段階が、ディベートを使って文学教材を読んでいく学習となります。

ディベートを使って『故郷』を読む

中学3年生の文学教材と言え、何と云っても『故郷』です。義務教育段階最後の文学教材としての位置付けです。この作品をどのような方法で読んでいくのか、どんな学習を仕組むのか、授業者の腕の見せ所です。今回は、入門期におけるディベート学習の最終段階の教材として位置付けました。まさにジャンプ教材としてふさわしい作品です。

故郷ディベートにおけるテーマ（論題）

今回は、故郷の読解学習を進めてきた中で討論となり、結論が出なかった内容をディベートのテーマ（論題）としました。

例えば、授業中に「ルントウはなぜかわいそうなのか」と問いかけました。生徒からは様々な意見が出されました。次に、「わたしはかわいそうではないのか」と投げかけました。生徒は、ちょっと考えたようでしたが、やはりかわいそうだという意見を出してきました。そこで、では、どちらがかわいそうなのかということになりました。ディベートのテーマは、「わたしとルントウとではどちらがかわいそうか」となりました。

また、この作品では、すさんでいく人々を、わたし、ヤンおばさん、ルントウを代表に3つの異なる立場から描いています。この三者三様の生き方は、互いに隔絶され交わることはありません。授業中に「灰の山に碗や皿をかくしたのは誰か」という問いかけをしました。すぐに生徒から、わたし、ルントウ、ヤンおばさんの3人が出されました。そして、ある生徒から、シュイションとホンルの可能性もあるという意見が出されました。

そこで、四者を取り上げ、「灰の山に碗や皿をかくしたのは、わたしかルントウかヤンおばさんか、それともシュイションとホンルか」というテーマを設定しました。この場合は、立場が4つになるため、変形型のディベートになります。パネルディスカッションに近い形となり、また新たな学習ができるものと考えました。